

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 17 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370333

研究課題名(和文)世紀転換期「エキゾチック」への眼差しをめぐる英語の言説研究：イタリアから日本へ

研究課題名(英文)A Study of the Discourse of the "Exotic" in English at the Turn of the 20th Century: From Italy to Japan

研究代表者

北原 妙子 (KITAHARA, Taeko)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：90315820

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は世紀転換期の「エキゾチック」をめぐる英語言説に着目し、どのような日本(人)像が流通したかを探求した。ノンフィクションでは英国外交官AlcockとSatow、旅行家Bird、フィクションではHearnとMrs. Fraserを取り上げた。先にHenry Jamesの「イタリア」をめぐる小説・紀行文を検証し、「エキゾチック」という点でイタリアもヨーロッパの外部として日本同様な眼差しを向けられたことが分った。日本表象において富士山、芸者、侍等のステレオタイプの記号が旅行記・小説共に描かれるが、特に小説を通じそうした固定観念を覆すような新たな日本・日本人像の創出が試みられていたことが見出せた。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the discourse of the "exotic" in English at the turn of the 20th century, exploring what kind of images of Japan and the Japanese were dominant in the Meiji era across various genres, including diaries by British diplomats (Alcock and Satow), travel writing (Bird), and fiction (Hearn and Mrs. Fraser). Before analyzing the representation of Japan and the Japanese, I examine the depiction of "Italy" in contemporary fiction and travel writing by Henry James, drawing a parallel between the "exotic" appeal of Italy and Japan for the West at this time, as the subtitle of this study suggests. In both fiction and nonfiction, Japan and the Japanese are represented by stereotypical signs such as "Fujiyama," geisha, samurai, and so forth. At the same time, however, one can see that some writers, particularly novelists, tried to subvert such stereotypes and create new visions of Japan and the Japanese.

研究分野：アメリカ文学、英語圏文学、アメリカ文化

キーワード：エキゾチック 明治期日本滞在記 イタリア旅行記 ジャポニズム小説 ヘンリー・ジェームズ メアリー・クロフォード・フレイザー 英国外交官 日本人・日本文化表象

1. 研究開始当初の背景

(1) 1980年代から始まったアメリカ文学史の見直し論争を拡充する研究の一環として、申請者は19世紀末一連の交流があった英米の文化人達、特に大西洋の両岸で活躍した人物達(William Dean Howells, Henry James, F. Marion Crawford, Isabella Gardner, Ouida等)が残した文化的・文学的仕事に注目し、ひとつの「文化圏」が着実に構築されていた模様を明らかにしようと試みた。これは科学研究費基盤研究(C)「19世紀末「アメリカ文化圏」の構築をめぐる研究、国際小説家サークルを中心に」(課題番号20520249)として採択された。上記の人物達の中で特にF・マリオン・クロフォード(1854-1909)というヘンリー・ジェームズの強力なライヴァルと目されたロマンス作家の仕事を再考した。そして作家が一時の流行作家にとどまらず、リアリズム対ロマンスといった文芸思潮の論争に影響を与え、後に映画化される作品を残したように、現代につながる大衆文化の源流を築いたことを明らかにした。クロフォード、ジェームズ、ハウエルズらは、相互交渉や切磋琢磨の結果、自分が理想と考える「アメリカ文化」を各自創出していたと思われる。

(2) 2005年に出たケンブリッジ版の『アメリカ文学史』シリーズ最終巻は、人種・ジェンダー・エスニシティ・階級などの差異を考慮した広範なアメリカ作家を網羅したが、クロフォードの扱いは希薄であった。しかしながら2009年に作家が埋葬されるイタリア、ソレントでクロフォードの没後100周年国際記念大会が開催された。米国、イタリアの研究者複数名および日本からは申請者が参加し、未発表の劇作や新たな伝記的資料についての報告をはじめ、代表作をポストコロニアリズムの文脈で読むなど今日的な再解釈の試みがなされた。2010年には渡辺利雄氏による『講義アメリカ文学史補遺版』(研究社)でクロフォードに一章が設けられ、大衆作家と

しての意義が論じられる。そして2011年には先の国際大会での論集が英伊の二ヶ国語で出版された。同年にJane Hanna Peaseによる*Romance Novels, Romantic Novelist. F. Marion Crawford*という最新の作品解釈と評伝が出るなど、申請者の課題とクロフォードの再評価の流れが一致し、忘れられたロマンス作家の発掘は時宜を得た結果となった。

(3) 先のクロフォードの伝記事項を調査中に彼の家族もユニークな経歴を持ち、日本と関係がある者もいることが判明した。例えば作家の父は、米国議事堂上の彫像で有名なThomas Crawfordであり、米国を代表する新古典主義彫刻家として現在も一定の評価を得ている。作品はメトロポリタン美術館など北米の主要美術館で今日も展示される。この彫刻家の誕生はボストン知識人達の交流の産物とも言えることが解明でき、先述した19世紀末「アメリカ文化圏」を胚胎するような運動が19世紀中葉に既に起きていたことを指摘できた。

(4) また作家の姉Mary Crawfordは英国外交官Hugh Fraserに嫁ぎ、明治時代に公使夫人として来日、その滞在記は、新渡戸稲造が『武士道』で言及するような日本についての名著となる(*A Diplomatist's Wife in Japan: Letters from Home to Home*, 1899)。作家の娘は修道女となり第二次大戦後来日、清泉女子大学初代学長を務め、戦後日本で英語・英文学教育に貢献した。

2. 研究の目的

(1) 先述したメアリー・フレイザー公使夫人の日本滞在記を調べていた際、美術運動「ジャポニズム」に観察される西欧諸国の日本への関心の高さが意識された。フレイザーの場合は日本や日本人に対しオリエンタリズムや文化帝国主義的な視点を比較的免れ、公平な友好的立場を取ろうとしていた様子が文書から伝わる。「日本」というテーマを扱う

英語で記された他の文献として時代的には少し先んじるが Isabella L. Bird の *Unbeaten Tracks in Japan*(1880) や初代駐日公使 Sir Rutherford Alcock による *The Capital of the Tycoon* (1863)、フレイザーより後任の *The Diaries of Sir Ernest Satow, British Minister in Tokyo (1895-1900)* を参照した際、各人がそれぞれの視点から異なる日本像を描出していることが印象的だった。

(2) 同時に日本を舞台やモチーフとする英語のフィクションも同時代に少なからず存在する。ギルバート&サリヴァンの『ミカド』やジョン・ルーサー・ロングの『蝶々夫人』、小泉八雲の『怪談』などが著名だ。他にもオノト・ワタンナ、メアリー・フェロノサ、フランセス・リトルなどの作家もおり、羽田美也子氏『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』(彩流社、2005年)が簡潔にこうした作家・作品論を紹介する。実はフレイザー夫人も日本をめぐる一連の小説を残しており、日本滞在記に比べ創作の方は研究者の注目度が低いものの、出版当時はニューヨーク・タイムズの書評で取りあげられるなど一定の評価を得ていた。

(3) かくして19世紀後半、維新後、特に明治時代の日本を扱った著作を「日本もの」といったジャンルとみなして研究する意義があるのではないかと着想を得た。これらの著作はフィクションとノンフィクションに大別できる。旅行が現在より不自由で危険を伴い、かつ来日が制限されていた時代、書き手は特権的地位にいる者が多いが、日本の本格的な研究者よりも、無意識な見解を知るため旅行者や外交官など一時的に滞在した、傍観者の視点を持つ人物の著作を選ぶことにした。その上で著作を日記、書簡、旅行記などのノンフィクション、小説を中心としたフィクションに分け、それぞれに描かれた日本・日本人の表象を検証したい。

(4) その際、はじめにイタリアの表象を検討

する。というのもイタリアは英米の芸術家がインスピレーションを求める憧憬の地で「グランドツアー」の必須目的地であるからだ。別格の扱いを受けるイタリアという土地はある意味、歴史や文化あふれるヨーロッパ諸国の中で「エキゾチック」な「外部」であり、イタリアへの視線は「東洋」の「エキゾチック」な日本に向ける視線といかに異なるかは考察に値すると考えるからである。

3. 研究の方法

本研究は文献研究を主とした4年計画で、三段階を計画した。第一段階として、同時代性という観点から紀行文でも有名なヘンリー・ジェームズのイタリアを扱う小説ならびにイタリア旅行記を検証した。

第二段階は、明治時代の日本を描いたノンフィクション、バードとオールコック、サトウの記録を検討する。時代の変遷に伴い浮かび上がる日本像の変化を探った。

そして最終段階では、日本に関するフィクションということで、フレイザー夫人とハーンの小説を考察した。ハーンは愛好者が多く研究も多数あるが、フレイザー夫人との比較はなく、フレイザー夫人の小説研究は未開拓といえる。必要に応じ、現地視察や資料収集のためにイタリア(ジェームズ関係)、英国(オールコック、サトウ関係)、アイルランド(ハーン関係)へ出張した。

4. 研究成果

(1) はじめに、イタリアの表象を検討した。明治期日本における英語言説との同時代性という点で、ヘンリー・ジェームズのイタリアを扱う小説(*Roderick Hudson*, 1875)ならびに紀行文(*Italian Hours*, 1909)を検証した。小説の主人公、ハドソンのモデルと考えられる、前述した、ローマで活躍した実在の米国人彫刻家、トーマス・クロフォードの経歴・

作品とハドソンのキャリアを比較考察した。そして彫刻家の主人公がイタリアの文化や歴史に触れ、その重みに圧倒される様子をたどり、小説に描かれるイタリアは部外者が疎外される場である、とジェームズが考えていたことが分かった。

一方、旅行記に描かれるイタリアは、旅行ガイド的スケッチから抽象度の高い総体となることが分かる。生涯、14回訪伊するが、その都度ジェームズ的感受性は高まりイタリアのとらえ方も詩的に変容されていく。しかしながらジェームズにとって、外部としてのイタリア、異国趣味の対象という眼差しはここでも変わらない。特にイタリアの中でも生命の根源のようなナポリ以南、シチリアなどの深南部に作家は対峙できない。そこから国籍やセクシュアリティという点で、自己の曖昧なアイデンティティや立ち位置が顕在化される。(これは2017年に口頭報告したように、西洋文明の優越性を疑わないイザベラ・バードの旅行記と比較すると顕著である。)

(2) 次に、日本についてのノンフィクション研究を進めた。外交官のラザフォード・オールコック、アーネスト・サトウ、そして旅行家イザベラ・バードの日本滞在記を検討した。(順に *The Capital of the Tycoon*, 1863、*The Diaries of Sir Ernest Satow, British Minister in Tokyo (1895-1900)*、*Unbeaten Tracks in Japan*, 1880)。前者二名が男性外交官、後者は民間人女性旅行者という立場の違いはあるものの、文体や語り口はそれぞれに個性があり、無味乾燥な記録ではない。文章の中で、外交、文化(オールコック)、歴史、社会(サトウ)、庶民生活、日本奥地(バード)など強調点は各自で異なる一方、富士山や日本女性など共通して着目する対象もある。異文化趣味的な視線と偏見も時に混じるが、概して日本文化の美点を見出し、国民への敬意や愛情を持った言説は、帝国主義的支配や所有の眼差しに

満ちた言説とは異なる。明治期日本を知る資料であると共にノンフィクションの体裁で書かれた、日本について読み継がれる「物語」を編み出してきたことが指摘できた。

(3) 最後に「フィクション」に描かれる日本・日本人像を検証した。代表的な作家としてラフカディオ・ハーン(*Glimpses of Unfamiliar Japan*, 1894; *Kwaidan*, 1904)とメアリー・クロフォード・フレイザー(*The Custom of the Country*, 1899; *A Maid of Japan*, 1905)を主に検証した。同時代の明治期に創作活動をしていたにもかかわらず、ハーンが再話文学の形で近代化以前の素朴な日本や日本人の姿を理想と提示するのに対し、フレイザーは『蝶々夫人』に代表されるような日本人女性が「遺棄される」ジャポニズム小説に反駁するような物語を展開した。同じ日本・日本人を対象としても全く異なる創作世界となっている。また日本表象において富士山、芸者、侍などのステレオタイプの記号が旅行記・フィクション共に描かれるが、特にフィクションを通じ、そうしたステレオタイプを超越する新たな日本・日本人像が創出されていたことが見出せた。換言すれば、作家達はノンフィクションでは不可能な理想的日本(人)のビジョンを提示したといえる。

総括すると、本研究の副題で予見したように、「エキゾチック」という点で西欧列強がイタリアに向けた視線と、日本に向けた視線には相通ずるものがあり、イタリア・日本とも支配や所有の対象、ジェンダー的には西欧列強諸国を男性とすれば、女性的な存在として捉えられてきたことが分かった。「エキゾチック」という鍵概念から、二カ国の意外な接点を指摘できた点が本研究の独創性であり、今後更に発展が期待できる研究の切り口を提示できたといえよう。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

Taeko Kitahara, “The Creation of Art for the American Republic by Sculptor, Crawford and Poet, Longfellow”, 『白山英米文学』、査読無、41号、2016、pp. 37-58、<http://id.nii.ac.jp/1060/00007929/>

Taeko Kitahara, “Mary Crawford Fraser’s Japan”, 『白山英米文学』、査読無、40号、2015、pp. 57-70(のオリジナル英語版)、<http://id.nii.ac.jp/1060/00006993/>

Taeko Kitahara, “Il Giappone di Mary Crawford Fraser”, trans. by Alessandra Contenti, *Genius Loci*, 査読有、No.11、2012-13、pp.43-52

〔学会発表〕(計 4件)

北原妙子、「英国公使夫人によるジャポニズム小説」、日本英文学会、2018

Taeko Kitahara, “Exotic Travel to Italy and Japan: Henry James and Isabella Bird”, The 7th International Conference of the Henry James Society、2017

北原妙子、「ヘンリー・ジェイムズとイタリアー西洋におけるエキゾチック表象」、成蹊大学アジア太平洋研究センター プロジェクト研究会「ネーションと文学ーコロニアリズムとグローバリズムのなかで」、2015

北原妙子、「実人生と創作ー彫刻家、トーマス・クロフォードと『ロデリック・ハドソン』」、ヘンリー・ジェイムズ研究会、2014

〔図書〕(計 2件)

北原妙子 他、作品社、『ネーションを超えてーポストコロニアリズムの現在』(仮題)、庄司宏子編、2018、350頁予定

北原妙子 他、英宝社、『ヘンリー・ジェ

イムズ、いまー歿後百年記念論文集』、里見繁美、中村善雄、難波江仁美編、2016、5-25

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0件)

○取得状況(計 0件)

〔その他〕
ホームページ等

Taeko Kitahara, “Exotic Travel to Italy and Japan: Henry James and Isabella Bird” *Proceedings: Jamesian Cultural Anxiety in the East and in the West*, 査読有、2017、pp. 229-235

6. 研究組織

(1)研究代表者

北原 妙子 (KITAHARA, Taeko)
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：90315820

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()